

# あ と が き

富岡製糸場総合研究センター報告書の3号というべき冊子が刊行の運びとなった。

当製糸場に関する資料は昭和52年度に編さんされた『富岡製糸場誌』が根本史料集的な存在ではあるが、その中核的資料は官営期の政府所管資料が多く、そのために操業に必要不可欠であったフランス製の製糸器械やお雇い外国人の実像や来歴等については政府所管資料の域を出ないところがあった。

富岡製糸場は外国との技術交流なくしては達成できなかったものであるだけに、既刊の富岡製糸場総合研究センター第1号・第2号報告書も、それらの観点から究明を試みたものであった。

今回の報告書はその上に立って、富岡製糸場の首長として活躍したポール・ブリユナが勤めていた在横浜のエシュト・リリアンタール商会の経営者の実像とブリユナが明治政府に雇用されるのに大きな役割を果たした同商会横浜支店長のガイゼンハイマーの実像に迫ろうとしたのが、第1章の「エシュト・リリアンタール商会と同商会横浜支店長ガイゼンハイマー」の論考である。本論考はフランスでの現地調査によって得られた多角的な資料を活用しているところに新機軸が認められる。

また初期の富岡製糸場の工女たちは全員寄宿舎生活が原則であったが、当工場は資本主義下の工場制度を導入したことも大きな特色とされているところから寄宿舎規則や労働規則等もワンセットとして導入したが、これが19世紀のフランスの寄宿制工場と比較してどのような特徴があると言えるのかを究明したのが第2章の「旧官営富岡製糸場の設立当初の労働環境に関する研究」である。

本論考もフランスでの現地調査によって得られた多角的な資料や国内の他の器械工場との比較検討をしているところに新機軸が認められる。

さらに現実的な意味合いの強いテーマとなってしまったが、「富岡製糸場と絹産業遺産群」は富岡製糸場・高山社跡・荒船風穴・田島弥平旧宅の4資産に絞り込まれた。その大きな理由の一つに、各資産は独自の技術革新を果たすと同時に富岡製糸場との技術連携・生産連携や海外交流が挙げられているが、特に明治期末の富岡製糸所と高山社との関連を追究したのが第3章の「富岡製糸場と絹産業遺産群」の論考である。両社は特異な状況下で関連性を深めたことが究明できたといえよう。

このように、富岡製糸場(所)の研究・究明は今後とも多角的な立場から試みることが大切であるという課題を与えてくれたのが今回の報告書の成果ともいえよう。

平成24年3月

富岡製糸場総合研究センター

所長 今井幹夫